

## 当座理論はどのような理論であるのか

尾形まり花

千葉大学人文社会科学研究所特別研究員

D・デイヴィドソンは、話者が規則に則らずに発話したとしても、理解される場合があるとして、個人言語 (idiolect) が存在することを重要視した。たとえば、発話者の言い間違いや幼児が発した語など、それまでの言語学習の場では習得した事のない語であっても、われわれは聞き手として、発話者がそれをもって何を言わんとしているのかを理解できるのである。デイヴィドソンは、それらの理解においては、発話を解釈するための理論をわれわれはその場で構築しているのだと考え、その理論を当座理論 (passing theory) と呼び、一方、解釈のためにすでにわれわれがすでに手にしていた理論を先行理論 (prior theory) と呼ぶ。

本発表の目的は、これまで、語の個人的使用と意味の問題ととらえられる事が多かったこの個人言語に関する議論が、真に提起する問題は何かということを考える事である。そしてその検討の上で、個人言語の問題が、デイヴィドソンの出来事に関する研究と深く結びついていることを明らかにすることを目指す。

1

規則に則らずに発話したとしても理解されることがあるのは、われわれのだれもが経験するところである。しかし、デイヴィドソンがこの事実を強調するのは、個人言語が成り立てば、哲学者や言語学者が考える「言語」の概念が壊れると考えるためである。これまでの言語哲学の文脈では、個人言語の可能性を認めても、個人言語とはあくまでも例外的であるとみなした。規則に則って話すということが基本にあるからこそ、そのようなイレギュラーは理解可能なのではないかということである。しかし、デイヴィドソンは個人言語は例外的な語の使用ではないと主張する。学者たちは言語を、範囲を確定されているかのように扱ってきたが、発明された個人言語が聞き手に理解されることは日常的に起こっている。よって、範囲を確定できるという意味での言語は存在しないのである。

以上のようなデイヴィドソンの主張に対しては、当然のことながら、言語にとって規則遵守の問題が重要であると考えられる論者から反論があがった。たとえば M・ダメットは、デイヴィドソンは語の意味を話者の発話意図と重ねてしまうと批判する。語は話者の意図とは離れて、語自体で意味を持つとダメットは主張する。また、J・マクダウェルは、一つの語の背後には共同体があり、共同体にとって規則遵守は重要であると強調する。なぜなら、規則はそれぞれ異なる身体で世界を知覚するわれわれに、共通の知覚や思考を保証するからである。

これらの反論に対してデイヴィドソンは、私的言語の問題と個人言語の問題を区別することで反論する。私的言語が概念把握に関係するのに対して、個人言語はある程度の言語学習を積み、すでに概念を習得した者のみが持つことができる言語である。

概念を習得した者にとっては、それぞれの実践における規則は重要ではないのである。

2

個人言語が通じてしまうという観察は常識的ですらあり、もっともだと思われる。だが一方で、その事実が論拠として強力であることもあり、なぜ規則遵守の問題が重要であるとする論者がこの主張に納得しないのか、自分の主張はどのような可能性を持っているのかという点については、デイヴィドソンはあまり展開していない。

デイヴィドソンは個人言語について論じた有名な論文「墓碑銘のすてきな乱れ」において、個人言語がK・ドネランの論じる確定記述の指示的用法と関係すると述べる。個人言語が規則違反でも通じるように、ドネラン説も、異なった語をもって、言わんとするところを伝えるからである。

ドネランは、発話者が指示する対象が存在し、その存在が話者と聞き手のあいだで共有されているのなら、誤った語の使用であっても何事かの真実を伝えると主張した。なぜなら、その誤った使用が何を指示しているのかという了解が両者のあいだにあるのであれば、聞き手は発話を理解することができるからである。

すると、デイヴィドソンの提起する個人言語の問題も、このように考えることができるだろう。個人言語を批判する論者は、デイヴィドソンが逸脱的な語の使用を認めることを批判し、語の意味は簡単には変更できないのだと説くが、個人言語の問題とは、ある語の意味が変わることではなく、異なる語を使うにもかかわらず指示が変わらないことなのである。

つまり、当座理論と先行理論の区別は考えられてきたよりも根本的な違いだということだ。先行理論は話者と解釈者がこれまでに習得してきた言語であり、すべてがすでに書き出すことのできる、ルールブックに載る規約的な理論であるが、当座理論はコミュニケーションにおいて共有される当の出来事やものへの指示を含む理論、存在者を含む理論である。記述される以前の、よって命題化される以前の当の出来事を含むこの理論は、先行理論とは存在論的にまったく異なる理論なのである。

3

以上のことは、どのような含意を持ち、デイヴィドソンの出来事と言語に関する研究にどのように関わっているのだろうか。

デイヴィドソンは、出来事を特殊者と考えることを提唱する。特殊者とは一回限りの当の出来事、一個の当のものを具体例とする。出来事を特殊者と考えるならば、一個の出来事は、その出来事を何において見るかによって、様々に再記述が可能になる。

ドネランが言うように、誤った言語の使い方であっても発話者と聞き手のあいだで意思疎通がなされるのであれば、そのとき二人は一個の共有される特殊者を念頭に置いて、それぞれに再記述をしながら、会話をしていると考えることができる。そこでは特殊者関与的な発話理解がなされているのだ。

この一見当然のように見える発話理解は、しかしながら、言語理解に特殊者を介在させずに論理関係（命題間の関係）だけに注目していくやり方には、不可能である。なぜなら、特殊者に与えられるそれぞれ異なる記述は、論理関係からは導けないことが主だからだ。

本発表では、当座理論がどのように特殊者関与理論であるのかを確認していきたい。